



あるじでえ

No. 87

世田谷区教育委員会 民家園係

〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03 (3417) 8492◎ 岡本公園民家園
☎ 03 (3709) 6959

平成13年 3月31日 発行

小正月の行事 (その2)

(はじめに)

以前正月行事の流れの一つとして、小正月の行事の一部を紹介しました(「あるじでえ」No. 7 参照)。今でこそ元旦の大正月が重要な行事として扱われ、小正月は忘れられていますが昔は小正月こそが庶民にとっての重要な行事でした。重要だったからこそ数多くの行事が存在し、人々の様々な祈りがそこに込められていました。今回は以前紹介しきれなかった行事を紹介しながら、小正月とはどのような物だったかを見ていきたいと思います。

(小正月とは?)

小正月とは一月十五日、厳密には十四日の日没から十五日までの間のことを指します(地域によって違う場合もあります)。日本の古代の風習では満月から次の満月までの間を一ヶ月としていましたが、そこへ新月から新月を一ヶ月とする新しい暦が平安時代の頃中国から入ってきました。それが当時の政府であった朝廷に採用されて、朔旦(朔とは新月を指し、そこから一日という意味になった)が年のはじめとして朝廷で祝われるようになりました。そして朝廷ではこの新しい暦を庶民にも奨励しましたが、一般の人々の間では古い暦も生き続け、十五日に行われる正月も行われ続け新しい暦の正月と区別するため小正月と呼ばれ祝われていくようになりました。

昔は満月を望と言ったため、満月に当たる日に行われた小正月を望の正月とも言っていました。現在と違い発達した情報伝達網をもっていなかった当時では、全国に伝わるまでの時間差がかなりありました。そのせいか、都が置かれていた近畿地方では早くから新しい暦が浸透しあまり小正月の風習が見られないようです。逆に近畿地方から離れるほど小正月の行事が色濃く残っているようです。時と共に一日に行われる大正月が一般的な正月になるにつれて、小正月は農耕に結びついた予祝(豊作を祈る)行事の色彩が強くなっていました。これから紹介する小正月の行事も予祝行事の一つです。

(繭玉)

繭玉は養蚕が行われている地方で行われている小正月の行事で「マユダマ」、「メーダマ」などと呼ばれており、その年の蚕がよく育つようにとの祈りが込められていました。喜多見では十三日の夕食の後上新粉で丸い団子を作り、家の近くにあるネコヤナギ(ネコヤナギがなければ樫の木を使った。またネコヤナギのことを川柳とも言う。)のよく繁っているものを採ってきて、枝に繭がなっているように団子を刺します。そして大黒柱にくくりつけたり、神棚のあるザシキに石臼を置いてその上に刺すなどして飾りました。

家によって違ったようですが飾った後の団子は、多くの家ではどんど焼きの時に焼いて食べたようです（どんど焼きについては「ある



じでえ」No.7を参照してください。)これを食べると風邪をひかないとか、無病息災になるなどと言われ、家に持ち帰って家族みんなで食べたそうです。

藺玉は今でも行われている地方は

ありますが、世田谷では昭和に入って養蚕が衰退していった頃から徐々に見えなくなり、戦後は殆どのところで行われなくなったようです。

またこの藺玉はそれぞれの地方でとれる作物によって呼び名が変わり綿作地域では「餅花」と呼び、藺玉と同じく綿の豊作を祈った行事でした。

(小豆粥)

今でもお正月にはお雑煮を食べ、鏡開きの時にはお汁粉を食べる家が多いと思います。しかし「小豆粥」というのは現代人の私には少し耳慣れない食べ物だと思えます。小豆粥はうるち米に小豆を混ぜて炊いた粥に、多くの場合、粥柱と言って餅を入れて食べました。喜多見地方ではニワトコの先を削り、それに藺玉ダングを刺してかき混ぜながら小豆粥を作ったそうです。また、粥の代わりに雑煮を食べた家もありました。小豆はその色が赤い色をしているせいか、祝いの日の食べ物として昔から使われてきました。そのような関係もあってか小豆粥には特別な力があり、これを食べると1年間病氣や災難から守られると信じられ、小正月に食べられるようになりました。

また最初に触れたように小正月は農耕と密接につなが

っていて、その年が豊作かどうかを占うのも小正月の大事な役割でした。小豆

粥にもそのような側面があり、粥の炊きあがり方によってその年の豊作を占ったりしたそうです。

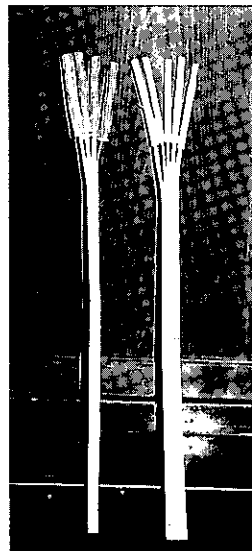


(粟穂稗穂)

私たち日本人の主食はお米です。しかし昔の人たちにとって白いお米というのは貴重なもので、祝いの日など特別な日にしか食べられないものでした。日常には今では食べられることが少なくなった粟や稗などが食べられていました。それだけに粟や稗のできは庶民にとって重要なことでした。「粟穂稗穂」は(喜多見では「アボヘボ」と読む)このような中から生じた行事で、粟や稗の穂に見立てたものを神棚に飾ったり、畑の堆肥の中に刺

すなどして粟や稗の豊作を祈りました。

粟穂稗穂は主に東日本で見られた風習で、喜多見ではニワトコの木を取ってきて長さ1尺(約30センチ)ぐらいにしたものを3本ほど束ね、神棚に供えて五穀豊穰を祈ったそうです。大正一昭和の初め頃まで行われていました。



文化財資料調査員 新井英之